ずいそう

中山間地域

藤　森　新　作

平成3年から11年まで中山間地域の活性化を研究テーマとするプロジェクト研究チームに所属していた。今日では中山間地域という言葉は認知されているが，研究を始めた頃は「なかやまかんちじょう」と読む人もおり，その定義から説明する必要があった。余談だが，小学4年生の授業で農業体験があり，児童に水田の機能や構造について説明するに当たり，言葉の認知度を知るために同年代であった我が娘に「土木」の読みを聞くと，「つちき」と答えられ，テキストは殆どの単語に読み仮名を付ける羽目となった。我々が当然のごとく話している言葉は，専門用語の固まりのようである。ちなみに世間一般のお母さんに仕事の内容などを説明する際は小学生と話すつもりでやる必要があると言われており，家庭で仕事の話を奥様たちに話してもどれだけ理解されているか，そのつもりで話した方が良さそうである。この反対に殆どの時間を仕事に没頭しているサラリーマンは，奥様たちがTVなどから日常的に得ている情報や歌などは殆どわからず，私などはTVを見てもお笑い芸人の名前や彼らのギャグ，あるいは歌謡曲は解らず，トニー・谷や橋幸夫などから進化していないようである。定年を控え，世間ズレしていると思われる頭の構造をどうしたら修復できるのか不安を持つこの頃である。

先日，建機メーカーの勉強会で50名の参加者に話す機会があったが，農家の出身者もしくは農業経験のある人は一人のみであった。農業にも関係した建機を販売しているメーカーの人々だから，少なくとも2割程度はと思っていたが予想は見事に外れた。一昔前は東京に住む人の大部分は地方に田舎があり，連休には田植え手伝いなどをしていたはずなのに，いつの間にか親の代が都会に住むようになったことを実感した。

中山間地域の実態を把握し活性化戦略を立てるために，この地域にある1,666市町村を対象に重点施策，問題点，生産・加工・販売，イベントなどについて30頁に及ぶアンケート調査を行い，1,250市町村から回答を得た。あまりにも膨大な内容で市町村の担当者が全項目を埋めるのに少なくとも一週間，これのデータベース化では入力に2名が1年半を要した。この結果と全国各地への調査を元にした論文を公刊誌で発表することとなり，各月6頁で26回連載，休む間もない2年間を過ごし，連載ものを書いている作家の気持ちが解るようになった。この調査での結論は，活性化は人づくりにあり，元気なむらには必ず将来を展望して物事を進める素晴らしい人がいることである。高齢者が人口の約半分を占める徳島県上勝町は，徳島市からバスで2時間の山間に位置する四国一小さな町である。ここでは，木の葉を料理の「つまもの」として出荷し，多品種少量出荷でかつ高品質であることから二番煎じを寄せ付けず，全国制覇を果たしている。この発端は，農協職員が大阪の料亭で皿にのった紅葉の葉に感動した若い女性を見て閃いたと聞く。その後の町や農協，住民が一体となった体制作りと企画力，高齢者の驚くべきパワー，この町の老人はパソコンで出荷戦略を立て，競争で出荷する。家の庭先で木の葉を摘み，あるいは笹舟などで箸置きを作り，なかには年収1千万円を稼いでいるお婆さんもいる。通勤地獄に苦しみ寝食を忘れ，ストレス社会にいるサラリーマンも顔なしである。

大分県では約30年前に平松知事によって，一村一品運動が提唱され現在までに開発された特産品は300品目以上で，大相撲九州場所では幕内優勝力士に干しシイタケ1年分（約10 kg）がガラス製のトロフィーに入れて贈られ，特産品PRにも抜かりはない。これ以外にもカボス，ハウスミカン，麦焼酎，豊後牛，関あじ，関サバと数えたら切りがなく，隣県には東国原知事の強烈な宣伝力で売り出している宮崎県があるが，大分県の30年の実績と比較すればまだまだこれからで，一時的な人気に溺れることなく，地道な人づくりと農林水産業を軸とした村おこしに励んで欲しい。昨年，米以外のものを栽培することが難しい排水不良水田で畑作物ができるように改良する（このことを水田汎用化という）ために大分県宇佐市を訪れた。当地には全国に4万余社を数える八幡宮の総本宮で伊勢神宮に次ぐ格式をもつ宇佐神宮があり，国宝の本殿八幡造りの檜皮葺と白壁朱塗柱が照葉樹林に映えて清々しい気分となる。麦焼酎「いいちこ」の三和酒類㈱はこの地にあり，山間部にある安心院（あじむ）盆地の焼酎も全国的に有名，また，冷涼な気象条件を活

用したブドウ生産は九州一位でワイナリーも構えている。さらには，温泉を利用したスッポン養殖と加工品販売も盛んである。歴史と伝統を重んじつつも，これに埋もれることなくさらなる企画力と人材育成で活性化を図れば，中山間地域は宝の山であり，都会にない楽しい人生が送れるような気がする。とりあえずは，様々なストレスで疲れたら，中山間地のぶらり旅を勧めます。

――ふじもり　しんさく（独）農研機構農村工学研究所
水田汎用化システム研究チーム長――

「建設機械施工ハンドブック」改訂３版

近年，環境問題や構造物の品質確保をはじめとする様々な社会的問題，並びにIT技術の進展等を受けて，建設機械と施工法も研究開発・改良改善が重ねられています。また，騒音振動・排出ガス規制，地球温暖化対策など，建設機械施工に関連する政策も大きく変化しています。

今回の改訂では，このような最新の技術情報や関連施策情報を加え，建設機械及び施工技術に係わる幅広い内容をとりまとめました。

「基礎知識編」
1. 概要
2. 土木工学一般
3. 建設機械一般
4. 安全対策・環境保全
5. 関係法令

「掘削・運搬・基礎工事機械編」
1. トラクタ系機械
2. ショベル系機械
3. 運搬機械
4. 基礎工事機械

「整地・締固め・舗装機械編」
1. モータグレーダ
2. 締固め機械
3. 舗装機械

● A4版／約900ページ
●定　価
非 会 員：6,300円（本体6,000円）
会　　員：5,300円（本体5,048円）
特別価格：4,800円（本体4,572円）
【但し特別価格は下記◎の場合】
◎学校教材販売
〔学校等教育機関で20冊以上を一括購入申込みされる場合〕
※学校及び官公庁関係者は会員扱いとさせて頂きます。
※送料は会員・非会員とも沖縄県以外700円，沖縄県1,050円
※なお送料について，複数又は他の発刊本と同時申込みの場合は別途とさせて頂きます。
●発刊　平成18年2月

社団法人　日本建設機械化協会
〒105-0011 東京都港区芝公園3-5-8（機械振興会館）
Tel. 03 (3433) 1501　Fax. 03 (3432) 0289　http://www.jcmanet.or.jp